

「黒塚古墳と長岳寺から山辺の道を巡る」

平成 21年(2009年)5月17日(日)午前 9時15分
近鉄奈良線学園前北口改札前集合(雨天中止)

担当 : 3丁目井守徳弘 (TEL 45-9375 携帯 090-6377-4888)

予定コース(徒歩約 5km)

近鉄・学園前駅=近鉄・西大寺駅=近鉄・平端=JR・天理駅=JR天理=JR柳本駅-長岳寺・五智堂-淳名城入
姫神社-黒塚古墳-黒塚古墳資料館-伊射奈岐神社-天神山古墳-葉神天皇陵-崇神天皇倍塚-天理市ト
レイルセンター(昼食)-長岳寺-(景行天皇陵まで山辺の道)-櫛山古墳-景行天皇陵-景行天皇倍塚-
大塚古墳-石名塚古墳-JR柳本駅-JR・天理駅-近鉄・天理駅=近鉄・平端=近鉄・西大寺駅=近鉄・学園前
駅 (解散 : 4時30分ごろ)

●長岳寺・五智堂 (重要文化財)

鎌倉時代の建設で、中央に一本柱の傘形の屋根がつき、その形から傘堂あるいは真面(まねん) とも呼ばれる。真ん中に太い心柱がありこれによって建物のほとんどの重量が支えられています。

心柱上部に四佛の梵字額があり全体で五智如来をあらわしています。五智如来は、五大如来ともいい、密教で5つの知恵を5体の如来にあてはめたもので、金剛界五仏のことです。真ん中に太い心柱が大日如来をあらわし、東西南北に4つの如来をあらわしています。通行参拝人の格好の目印となっていました。



キリーク 青
西 甘露王如来
無量寿如来



アク 黒
北 離怖畏(りふい)如来
釈迦如来



パン 白
中央 広博身如来
毘盧遮那如来



タラク 黄
南 宝勝如来
宝生如来



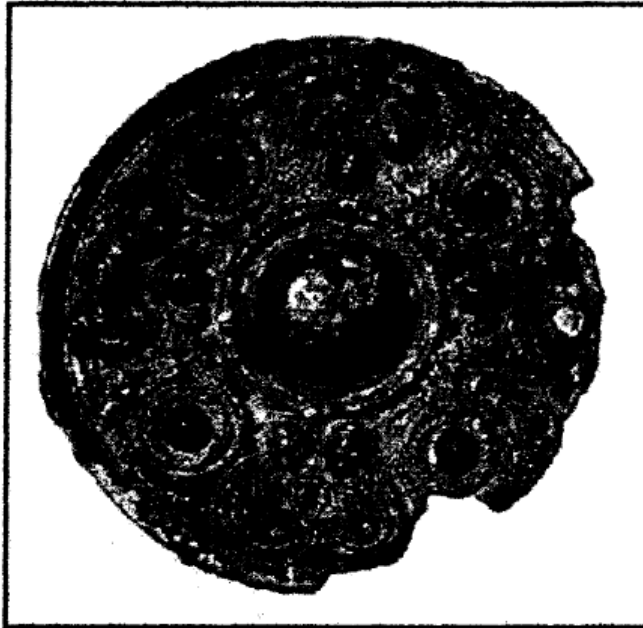
ウン 赤
東 妙色身如来
阿閃(あしゅく)如来

●淳名城入姫神社

『日本書紀』の第10代・崇神天皇6年条に、「天照大神と倭(やまと)大国魂神の二神を天皇の御殿の内に祀られていた。この二神が同床にあるのは畏れ多いとし、天照大神を笠縫村に遷し、日本(やまと)大国魂神を崇神天皇の皇女の淳名城入姫に祀らせたが、姫は髪落ち体痩せ、祭祀ができなくなった。」という記述があります。

この淳名城(ぬなき)入姫を祭神としています。『古事記』では沼名木之入日売命と表記されている。

大和(日本)大国魂神をお祭りしているのはJR長柄駅南すぐの大和神社で、日本最古の社です。一方の天照大神の祭った笠縫村は色々説はあるようですが、田原本町の近鉄笠縫駅というのがありますが、田原本町の式内社・鏡作坐天照御魂神社ではないかと思えます。ここの祭神は天照国照彦火明命で鏡がご神体です。



鏡作坐天照御魂神社の祭神天照国照彦火明命(鏡)

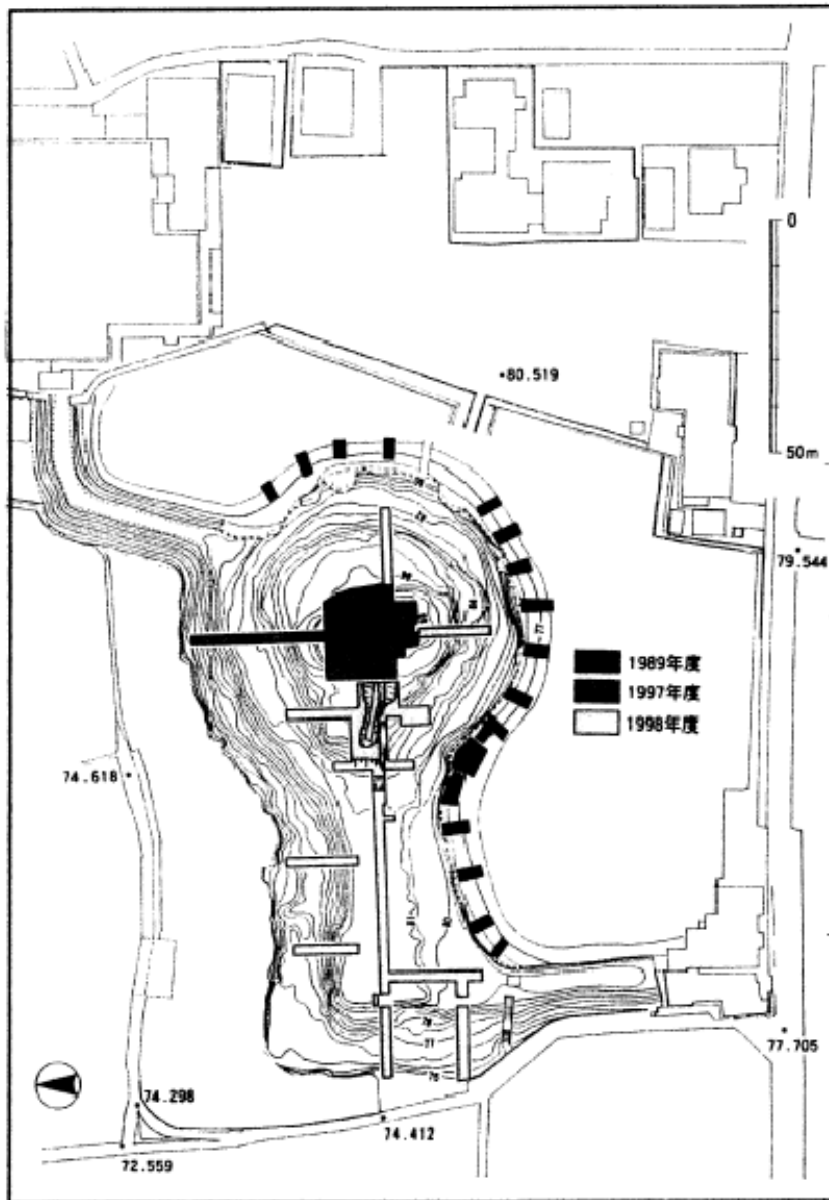
●黒塚古墳

黒塚古墳は、天理市柳本町にある前期(3世紀末頃)前方後円墳です。

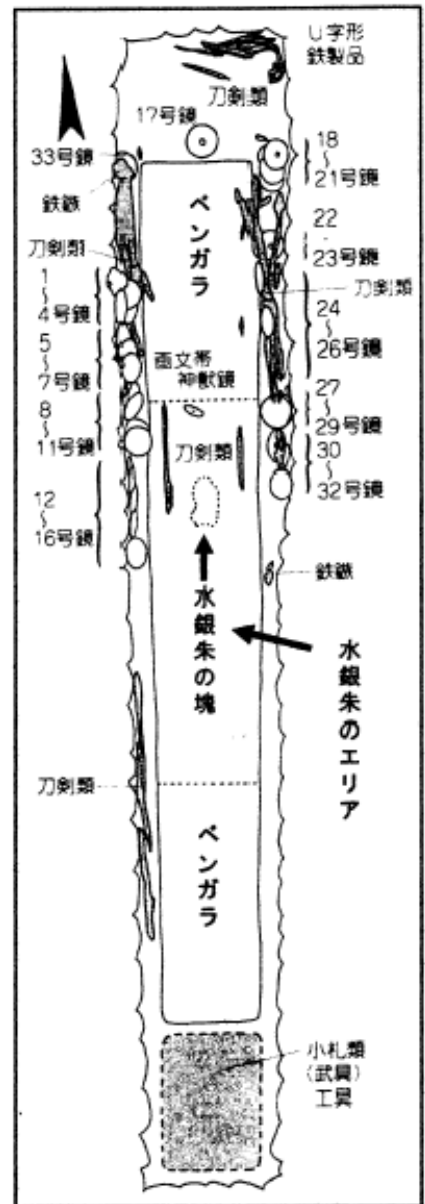
全長約130m、後円部径約7m、後円部高さ約11m、前方部高さ6m、前方部を西に向ける。

墳丘は中世から近世にかけての城郭利用で、その後の改変が著しく、戦国時代には古墳に柳本城を築城、江戸時代織田家が城跡に柳本陣屋を構築し柳本藩藩庁とした。

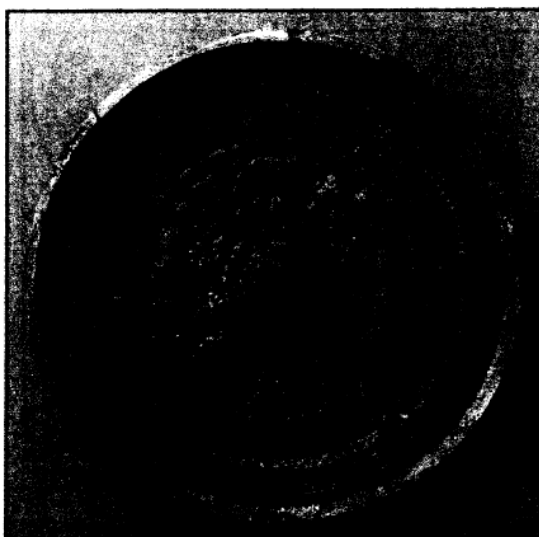
後円部の埋葬施設は竪穴式石室で、内法長約8.3m、北小口幅0.9m、高さ約1.7mで、二上山麓の春日山と芝山の板石を持ち送りに積んで合掌造状の天井を作り出している。石室内では、粘土棺床が設けられ、断面半円形の全長1m以上の刳抜式木棺が納められている。木棺には中央部の長さ2.8mの範囲のみ水銀朱を施し、両端はベンガラで塗られていた模様である。水銀朱のところに安置されていたものと考えられている。なおこの縦穴石室は、ほぼ真北を向いており、被葬者の頭も真北に向けられていたことは推定できる。



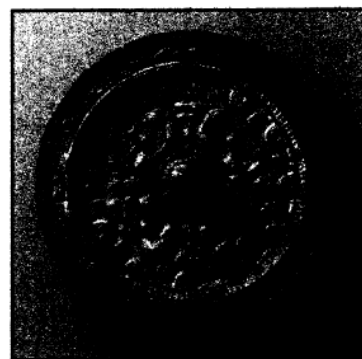
墳丘測量図



遺物出土状況模式図



1号鏡 三角縁銘帯六神四獣鏡

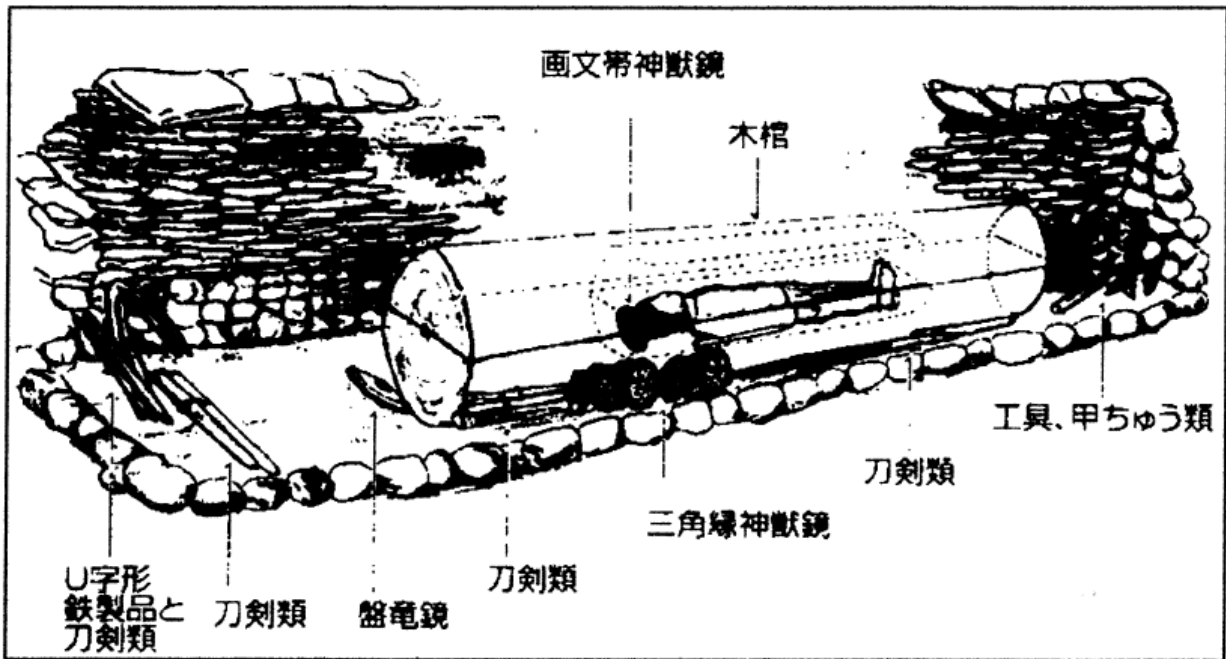


棺内
面文帯神獣鏡

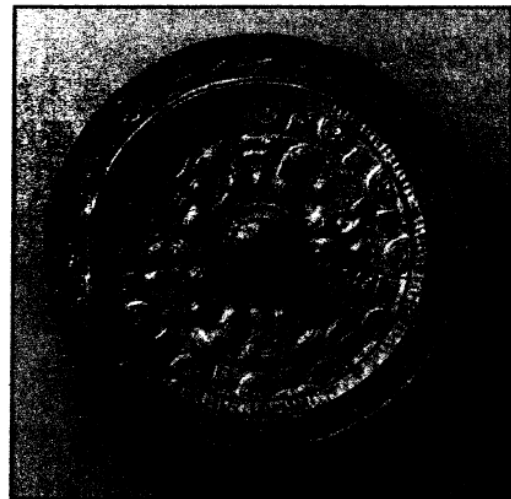
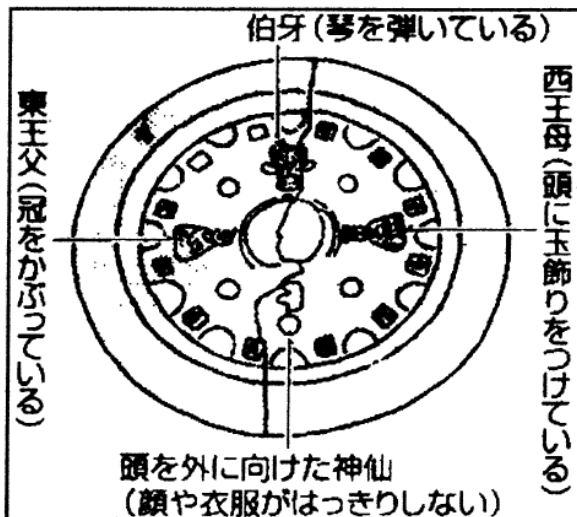
黒塚古墳出土三角縁神獸鏡同範(形)一覽表

鏡番号	鏡式	九州	中・四国	関西	中部	関東	不明
1号	三角縁銘帯六神四獣鏡		徳島・宮谷	京都・内里			
2号 27号 33号	三角縁獣帯四神四獣鏡	福岡・石塚山	岡山・湯迫車塚	奈良・新山			
3号	三角縁銘帯四神四獣鏡		(岡山・湯迫車塚)	京都・北山 滋賀・織部 (大阪・国分茶臼山)			
4号	三角縁銘帯四神四獣鏡	福岡・石塚山	広島・中小田1号	京都・椿井 M4・M8 兵庫・西求女塚 M8 大阪・万年山			
5号	三角縁獣帯五神四獣鏡			奈良・桜井茶臼山		群馬・天神山	
6号	三角縁銘帯四神四獣鏡					伝上野岡	
7号	三角縁銘帯四神四獣鏡		伝・岡山	京都・西山2号			
8号	三角縁神人龍虎画像鏡						
9号	三角縁獣帯四神四獣鏡	宮崎・持田		京都・椿井 M34	岐阜・龍門寺		
10号	三角縁三神四獣鏡			兵庫・水堂 兵庫・西求女塚 M4 京都・芝ヶ原 11号			
11号 25号	三角縁銘帯四神四獣鏡						
12号 31号	三角縁銘帯四神四獣鏡						
13号 26号	三角縁銘帯四神四獣鏡			京都・椿井 M6			
14号	三角縁画文帯六神三獣鏡			奈良・桜井茶臼山	岐阜東天神 18号		
15号	三角縁獣帯四神四獣鏡			奈良・佐味田宝塚			
16号 18号	三角縁銘帯三神五獣鏡		香川・奥3号	兵庫・権現山 M2 京都・椿井 M21	静岡・連福寺	群馬・三本木	泉屋 M23 (M24)
17号	三角縁複波文帯盤龍鏡			京都・椿井 M35 大阪・黄金塚(東柳)	愛知・奥津社		
19号	三角縁銘帯四神四獣鏡			兵庫・西求女塚 M2			泉屋 M25
20号 32号	三角縁銘帯四神四獣鏡	福岡・老司		滋賀・古富波			フリーア
21号	三角縁銘帯四神四獣鏡		香川・西山	京都・椿井 M4	愛知・奥津社		
22号	三角縁四神四獣鏡			兵庫・西求女塚 M9 京都・椿井 M5 奈良・佐味田宝塚	岐阜内山 1号		
23号	三角縁銘帯三神五獣鏡			兵庫・コエダニ 滋賀・古富波 京都・伝椿井	静岡上平川大塚		
24号	三角縁唐草文帯四神四獣鏡			兵庫・吉島(2面) 京都・椿井 M3 奈良・佐味田宝塚 滋賀・雪野山	静岡・赤門上		東博
28号	三角縁獣帯四神四獣鏡			京都・椿井 M12 大阪・石切神社			
29号 30号	三角縁獣帯四神四獣鏡	福岡・石塚山 御陵・韓人池					

34面の銅鏡のうち、棺内の画文帯神獸鏡 1面以外はすべて三角縁神獸鏡の舶載鏡に属する。鏡種は25種ある。33面のうち、同範(形)鏡が7種 15面ある。



三角縁神獣鏡は石室と、今は腐ってなくなった木棺のわずかな隙間に押し込むように納めてあった。鏡面はすべて棺の内側に向けてあった。白石太一郎（大阪府立近つ飛鳥博物館館長）は「鏡に被葬者の霊を封じ込める意味を持たせたのではないか。竪穴式石室は頑丈なその造りから、死者を厳重に閉じ込める古墳と考えられている。死者を鏡で取り囲むことで、封じ込める力をさらにつよめようとした可能性がある。」としているが、私は鏡の中の神獣で死者の霊を守るためとしたい。



棺内の画文帯神獣鏡

棺内の画文帯神獣鏡棺内の東王父と西王母と伯牙などで、獣は角があるのが龍、ないのが虎で龍虎でセットで登場するのが多い。

東王父が日を象徴し中国の神話上の仙人。西王母は中国で古くから信仰された女仙、不老不死の力を与える神女。伯牙は琴の名手。

●黒塚古墳資料館（無料）

表の黒塚古墳から復元された竪穴式石室と三角縁神獸鏡を中心に展示された展示館です。

●伊射奈岐神社

祭神は伊射奈岐神（配祀）菅原（道真）神である。

延書式神名帳にある城上郡の伊射奈岐神社に比定される。楊本（やなぎもと）天神、楊本天満宮と称し、かつては南東（約500m）の山田垣内にあったといわれる。創祀は未詳であるが『三代実録』（平安時代の901年に成立した歴史書）に貞観元年（859）に従五位上に叙されたとある。

延書式には名神大社となっている。文明年間（1469-1486）には現在地に鎮座し、楊本の総鎮守とされていた。

戦国の世、皇室をはじめ、楊本氏は篤く崇敬し、後奈良天皇は天文24年（1555）皇室再興を祈願している。

江戸時代の寛永年間（1624-1643）には柳本藩初代藩主織田大和守尚長（織田信長の弟・織田長益の五男）の庇護を受け、柳本藩社と呼ばれた。

●大和天神山古墳

1960年に県道拡張工事で後円部の一部が削られたのを機会に緊急発掘調査が行われた。大和天神山古墳は、伊射奈岐神社境内古墳として調査が進められたが、古墳名に人物名が混じらないという方針により、地元の呼称をとって天神山古墳とされたが、同名の古墳は各地にあるので大和をつけて命名された。古墳時代前期初頭の北向きの前方後円墳である。

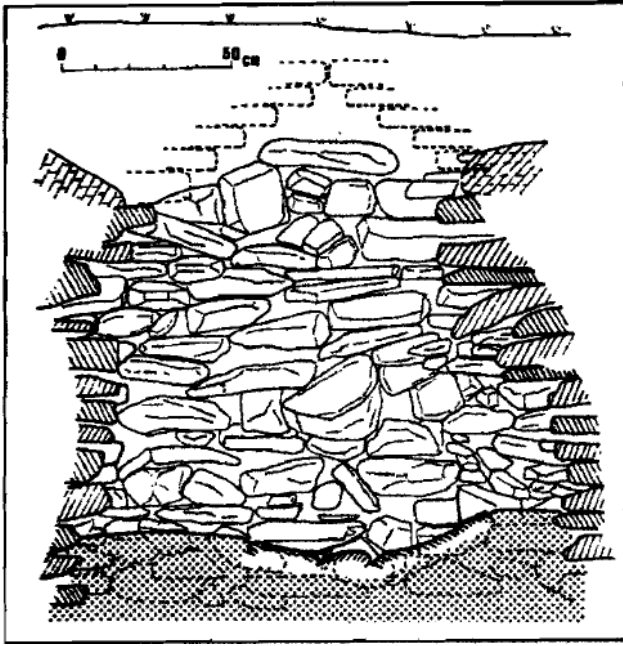
後円部のほぼ中央に長さ6.1mの竪穴式石室が検出された。石室の中央部には、現存の長さ2.6mの板材が残っており、その中央は仕切り板で区切って、内法1×0.5m木櫃（もくひつ）状になっている。大和天神山古墳には、合掌式つまり石室の両側へと持ち送って、特に天井石を設けない特異な竪穴式石室である。石室の内部には、一見木棺のようであるが細部を検討すると木櫃とした方がよい大きな木製容器が置かれて、約4kgの朱が納められていた。朱を大量に入手し使用している点で、3kgの朱を使用していた岡山県倉敷市の楯築古墳があり、東瀬戸内海との関連が考えられる。この木櫃の底板は、長さ2.6m、幅75cmであるが、断面は緩やかなU字形を呈している。

しかし、巨木を刳り抜いたものではなく、縦に長い三枚の板を合わせたものである。従って内部の底面は水平でなく、両端がカーブしてあがっている。木櫃の内部に、20面の銅鏡が置かれていた。20面の銅鏡は木櫃の四周に連続して長方形に置かれていて、前期古墳にしばしば見られるように一面だけ中央に置いてあるという配列とは全く異なる。

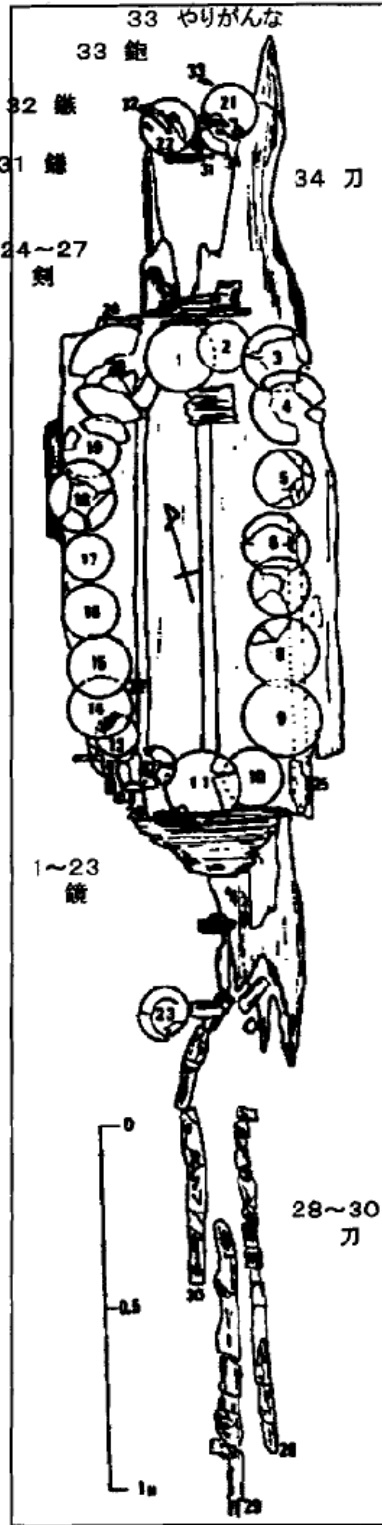
また、木口板（こぐちいた）の外部にも北方で2面、南方で1面置かれていて、計23面の銅鏡が検出されている。

木櫃内の20面を種類別に見ると、方格規矩鏡5面、内行花文鏡4面、画文帯神獸鏡4面、斜縁変形神獸鏡2面、獸形鏡3面画像鏡2面である。前方部から二重口縁壺（布留Ⅰ式）から出土している。

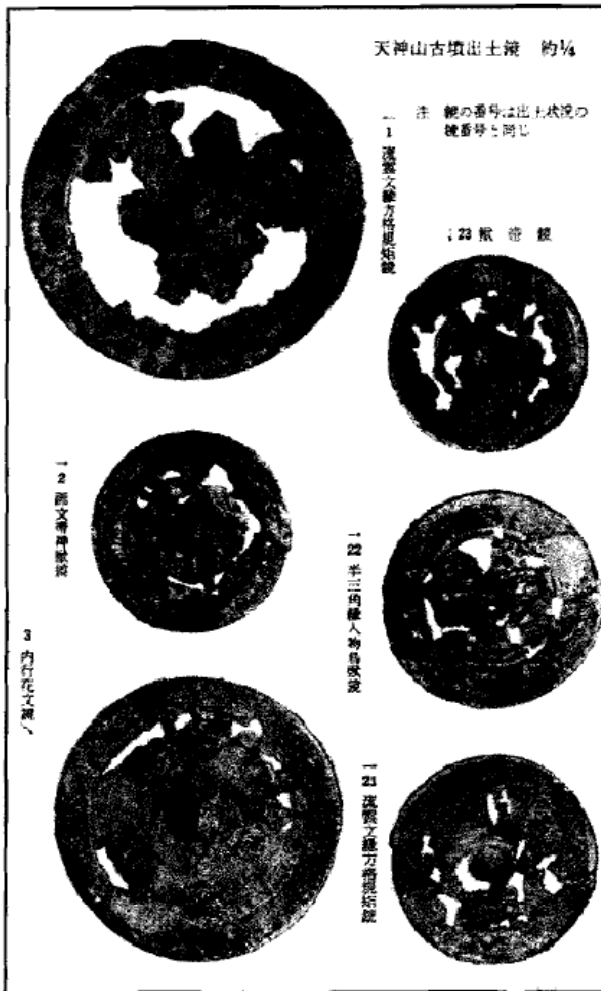
土器編年で布留Ⅰ式は3世紀末～4世紀前半までと考えられている。



竪穴式石室横断面



遺物出土状況



天神山出土鏡一部

●崇神天皇陵・行燈山古墳・宮内庁治定（山辺道勾岡上陵）

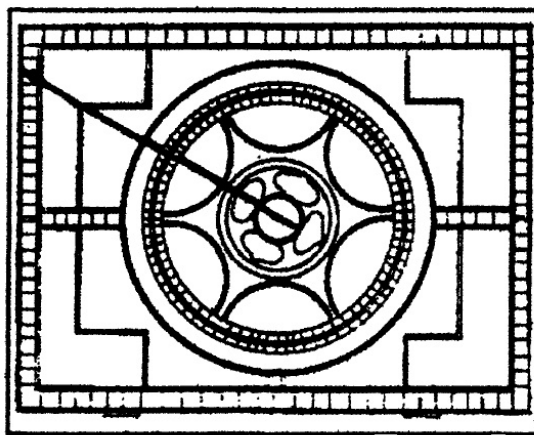
崇神天皇陵・行燈山古墳は全長が242m、正円形で3段築成の後円部は直径 158m、高さ23m。後円部頂上は平坦で円形である。前方部正面は、わずかであるが弧状をなしている。その頂上は、くびれ部に向かって少しずつ低く坂のように整形されている。後円部直径と前方部直径比は、1:0.8程度である。渡り土堤が後円部と前方部にあり、築造当初から設けられていたと推定されている。周濠の形状は左右対称の盾形とされている。

この周濠から出土したと伝える銅板がある。

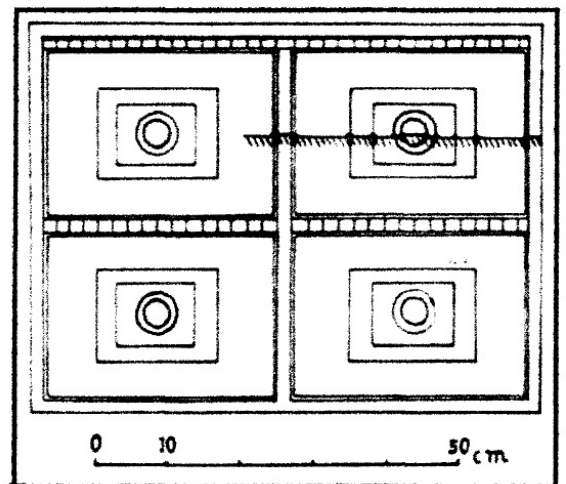
幕末の文久の修陵の開始時には、本古墳が景行陵だったのが、修陵事業の完成直前の1865年（慶応元）2月に、崇神陵に取り替えられた。

宮内庁の管轄する古墳であるので、研究者や国民は、中に自由に立ち入りできない。古墳時代前期（3世紀後半～4世紀）と考えられている。

内行花文鏡に
似た文様



伝崇神天皇陵出土板銅版復元推定図



第10代・崇神天皇

都は磯城瑞離宮（しきのみずかきのみや、奈良県桜井市金屋の志貴御県坐神社が伝承地）。『古事記』には、「師木の水垣宮（みづかきのみや）に坐しまして、天の下治めらしめしき」とある。

皇女・淳名城入媛命（沼名木之入日売命）の父君にあたる。

崇神天皇10年（皇紀では紀元前97年）9月、大彦命（メスリ山古墳）北陸道に、武渟川別を東海道に、吉備津彦を西道に、丹波道主命を丹波（山陰道）に將軍として遣わし、従わないものを討伐させた（四道將軍）。しかし、大彦命だけは異変を察知して和珥坂（わにのさか、奈良県天理市）から引き返し、倭迹迹日百襲姫命（卑弥呼）の予言から武埴安彦（たけはにやすびこ、孝元天皇の皇子）の叛意を知ることとなる。武埴安彦は山背から、その妻喜田媛は大坂からともに都を襲撃しようとしたが、天皇は五十狭芹彦命（吉備津彦命）の軍を遣わして喜田媛勢を迎え討ち、一方の安彦勢には、大彦命と彦国草（ひこくにぶく、和珥氏の祖）を差し向かわせ、これを打ち破った。10月、畿内は平穏となり、四道將軍が再び出発した。

崇神天皇68年（皇紀では紀元前30年）12月、120歳で崩御（『古事記』は、戊寅年12月崩御、168歳とする）。

『古事記』は崇神天皇の没年を干支により戊寅（ぼいん）年と記載しているので、これを信用して318年（または258年）没と推測する説も中には見られる。3世紀から4世紀初めにかけて実在した大王と捉える見方がある。

私は古墳時代前期（3世紀後半～4世紀）と考えられており、258年説を取りたい。

●崇神天皇倍塚

古墳名	墳形	規模	埋葬施設	出土遺物
アンド山い号倍塚	前方後円墳	122m	未調査	なし
南アンド山古墳 ろ号倍墳	円墳	約20m	未調査	なし
に号倍塚	円墳?	発表資料なし		

●天理市トレイルセンター（昼食）

愛称「トレイル青垣」で東海自然道に造られ、自然とふれあい・学び・憩いの場として提供されています。ここで昼食をとります。

トレイルとは森林・原野・山地などの踏み分け道。山の小道という意味です。

●真言宗・釜口山・長岳寺

山の辺の道に残る長岳寺は天長元年（824）淳和天皇の勅願により空海（弘法大師）が大和神社の神宮寺として創建された古刹であり、盛時には塔中48坊、衆徒300余名を数えました。以来、幾多の栄枯盛衰を重ねながらも、1180余年間連綿と法燈を守り続け今日に至っています。

文化財も多く、重要文化財としては仏像5体、建造物4棟があります。

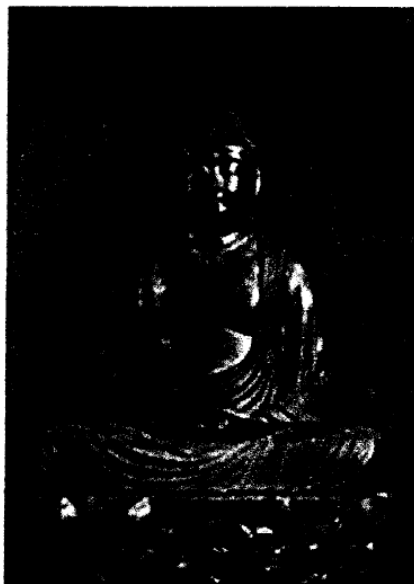
大門をくぐり両側に平戸つつじの生垣が続く玉砂利の参道を行くと我が国最古の美しい鐘楼門（重要文化財・平安時代）につきます。12,000坪の広くて静かな境内には四季折々の花の香りが漂い、花と文化財の寺です。

○本堂

天明3年（1783年）に再建された建物で、阿弥陀三尊像（本尊）と



勢至菩薩



阿弥陀如来



観世音菩薩

多聞天・増長天立像（重要文化財・平安時代中期）を安置している。

大正12年頃に修理が行なわれた際、阿弥陀如来と勢至菩薩の胎内に「仁平元年歳次辛未四月始、願主僧憲幸」の墨書が確認され、これを以って藤原末期の作となり玉眼（像の眼の部分に水晶を嵌め込む技法）嵌め込みの

いちばん古い銘をもつものとなった。(仁平元年は1151年)

写実的な鎌倉彫刻の先駆をなすものといえます。両脇侍が片足を踏み下げた半跏像とする形式は奈良時代にその例が見られ奈良時代の古典復興の意図があったとも見られる。

多聞天・増長天立像(重要文化財・平安時代中期)は、明治の神仏分離令により、もと大神神社の神宮寺であった大御輪寺が廃寺となり、長岳寺に移ったものです。

○庫裏(旧地藏院本堂及び庫裏)

重要文化財(国指定)。かつて48もあった塔頭のなかで唯一残った旧地藏院の遺構で、1630年～1631年建築であるが室町時代の書院造の様式を伝えています。

○楼門

重要文化財(国指定)。かつては上層に鐘楼が吊られていたために鐘楼門と呼ばれる、日本最古の鐘門である。下層は室町～安土桃山時代、上層は平安時代。寺伝では空海による創建当初から現存する建物というが、上層部分も空海の時代まではさかのぼらず、平安時代末期頃の建築とされる。

○大師堂

正保2年(1645)に建立されたと伝わる建物で、開基である空海(弘法大師)像が安置されている。

○拝堂

大師堂の前に位置する。

○大門

寛永17年(1640)再建。

○十三重塔

鎌倉時代の石塔

○弥勒大石棺佛

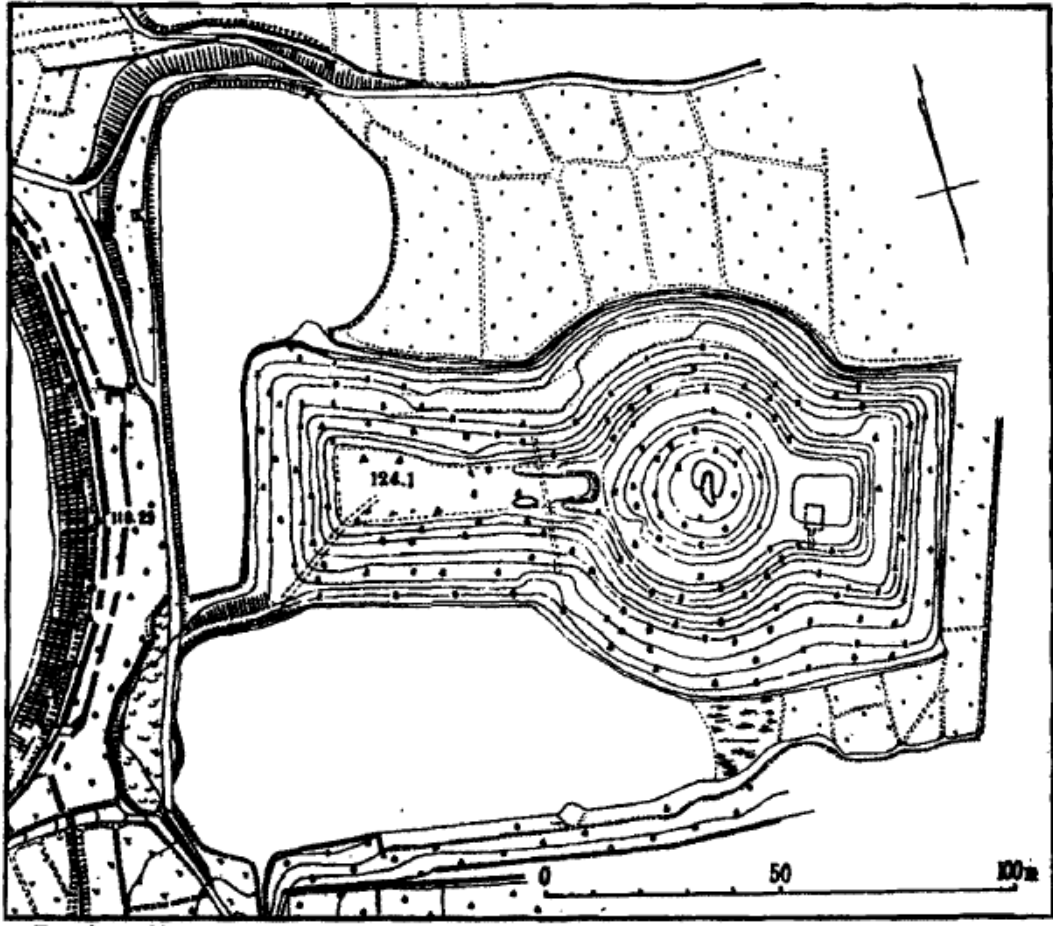
高さ2m、古墳の石棺を利用し、彫られた石仏

拝観料300円で長岳寺案内パンフがいただけます。案内パンフに境内の概略地図が載っていますので、参照ください。

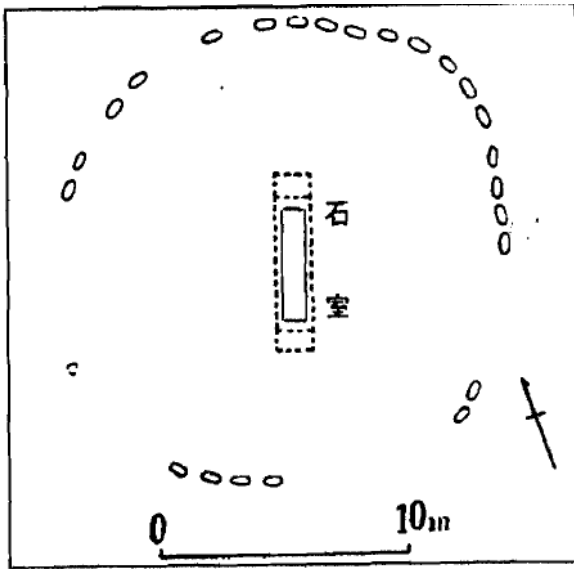
●櫛山古墳

櫛山古墳は古墳時代前期後半の双方中円古墳という特異な墳形をしている。この特異な墳形では、岡山県の楯築遺跡や香川県高松市の石清尾山(いわせおやま)古墳群の猫塚古墳がある。櫛山古墳や猫塚は、古墳前期でもその後半に属する古墳で、楯築弥生憤丘墓よりも100年ばかり後に築造されています。

墳丘長152m、中円部直径約90m、中円部の西側に前方部、東側に後方部を備えた双方中円墳である。段築は中円部・後方部3段と前方部2段に築かれていた。30cmぐらいの大きさの葺き石が憤丘全体に葺かれていたと見られている。中円部はほぼ正円形、前方部は正方形で前面の広がりや正面の弧状がない。周濠ではないが現状では前方部正面および南側、北側の一部に水濠がめぐり、他の部分は水田や畑地となっている。後方部は短く、わずかに開いている。



楡山古墳外形実測図



中円部楕円筒埴輪列



石室全景 北より望む

後方部の祭祀状遺構で、石釧、車輪石、鍬形石、石製釧と呼ばれる碧玉製腕飾類の破片、それら三種の碧玉製品を模造した土製品の破片、碧玉の管玉、鉄剣・刀子の被片と鉄斧、位牌形石製品とよばれ、人形の形骸化し遺物、高坪や壺などの土師器が出土した。碧玉製腕飾類は、もとの個体数にして石釧107、車輪石105、鍬形石23という膨大な量であるし、乱掘後残された数に過ぎないから、どれだけ多数が使われたかが分かる。

●第12代・景行天皇陵

『日本書紀』では景行天皇は山辺道上陵に葬られたとある。『古事記』では御陵は山邊の道上にありと記しています。現在、景行天皇陵は天理市渋谷町の渋谷向山古墳(前方後円墳・全長300m・全国第7位)に比定されています。

景行天皇は、『古事記』『日本書紀』に記される第12代の天皇です。和風諡号は大足彦忍代(おしろ)別天皇・大帯日子淤斯呂和氣天皇(『古事記』)という。日本武尊の父であるが、『記紀』の記事は多くが日本武尊の物語で占められている。

都は纏向日代宮(奈良県桜井市穴師付近)。晩年の景行天皇58年(128)に、近江国に行幸、志賀高穴穗宮(滋賀県大津市穴太)に3年間滞在した後、景行天皇60年(130年)崩御、143歳。『古事記』では137歳。

景行12年(82年)熊襲征伐として九州に巡行し景行19年に還御している。

日本武尊の記述は景行27年に日本武尊を遣わして、熊襲を征討させる。首長の川上梟帥を謀殺し、翌年に復命。

景行40年(110年)に蝦夷征討を命じる。伊勢神宮で叔母の倭姫命より草薙剣を授かり、陸奥国に入り、戦わずして蝦夷を平定する。東国一円を平定し、尾張国に戻り、官簀(みやず)媛と結婚。その後近江国に出向くが、胆吹山の荒神に崇られて身体不調になる。そのまま伊勢国に入るが、能褒野(三重県亀山市)で病篤くなり崩御した(景行43年)。白鳥陵に葬られた。

『古事記』によれば、死の直前に大和を懐かしんで思国(くにしのび)歌を詠んだとされている。

『日本書紀』では景行天皇が詠んだ思邦(くにしのび)歌とされる。

愛(は)しきよし 我家(わぎへ)の方ゆ 雲居立ち来も
倭は国のまほらま 豊づく 青垣 山籠れる 倭し麗し
命の 全(まそ)けむ人は 豊薦(たたみこも)
平群の山の 白樫が枝を う華(うず)に挿せ 此の子

景行天皇は『古事記』によれば、合計80人も御子がいた事になっています。

●景行天皇倍塚

古墳名	墳形	規模	埋葬施設	出土遺物
シウロウ塚古墳	前方後円墳	約 120m	未調査	なし
赤坂古墳 は号倍塚	方墳	約 25m	未調査	なし
上の山古墳 い号倍塚	前方後円墳	約 140m	未調査	朝顔形埴輪・木製品 鱗付円筒埴輪

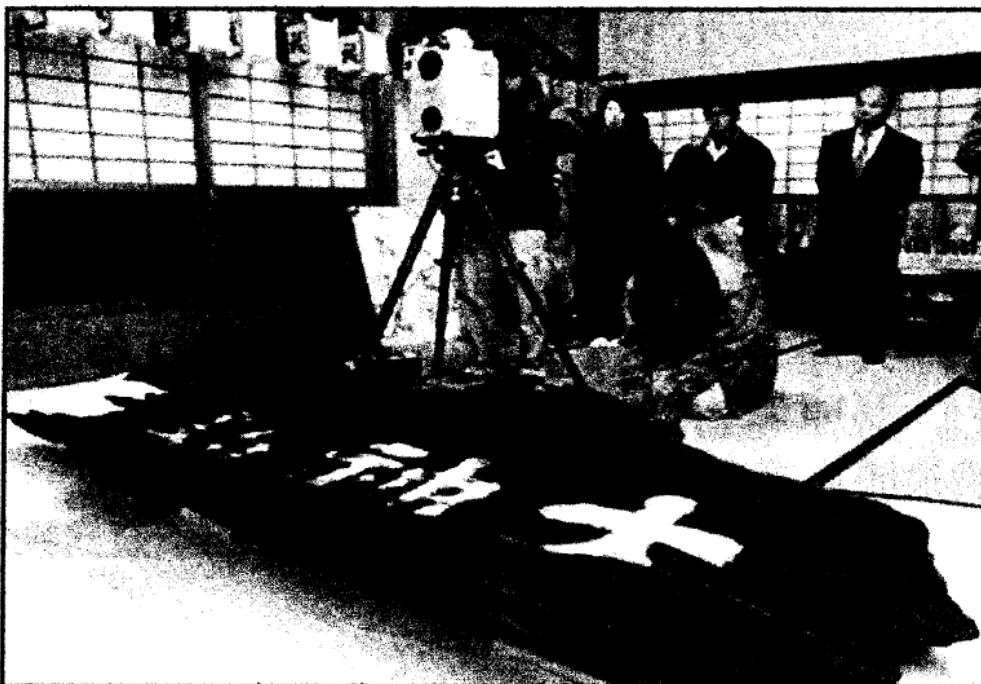
●柳本大塚古墳

古墳名	墳形	規模	埋葬施設	出土遺物
柳本大塚古墳	前方後円墳	約 92m	竪穴式石室	鏡・銅鏃

昭和52年(1977)に榎考研が実施した墳丘測定調査によると、柳本大塚古墳は、後円部の径 54m、高さ7.6m、前方部の幅29m、高さ3.4mを測る全長94mの前方後円墳である。古墳の後円部の頂きに築かれていた竪穴式の石室は、明治28年(1895)から翌年にかけて盗掘にあっている。その際、木棺材の他に若干の副葬品が出土したという。

ところが、この木棺材のその後の行方を記した資料が残っていた。大正12年(1923)に発行された学会「考古学雑誌」である。それによれば、地元の人が木棺材を額として所有していたが、明治35(1902)から36年頃、古物商の仲介で大神神社の東宮司が購入し、その後、「大神教」に移送されたという。

平成 21年 1月22日、この額に関する実に奇妙な考古学ニュースがメディアを通じて配信された。県立榎原考古学研究所 (=榎考研)の総括研究員らが前日に調査したところ、なんとこの額は明治時代に柳本大塚古墳から掘り出され、その後は所在不明になっていた木棺の身(み)の部分であることが判明というのだ。

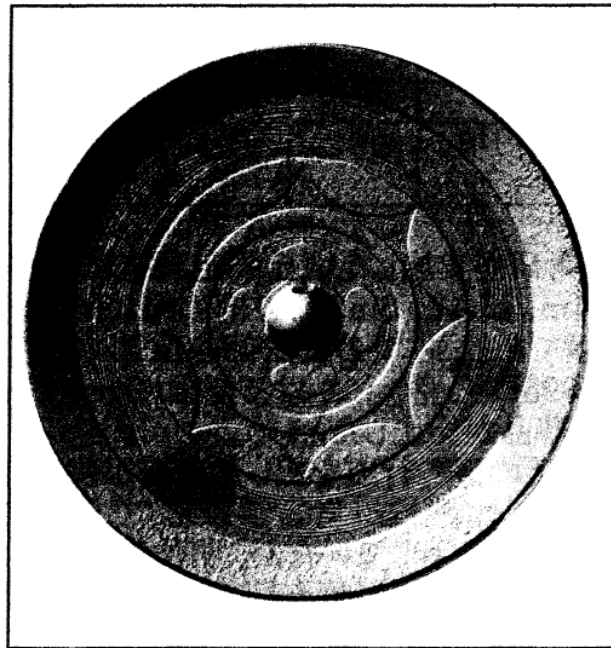


古墳の木棺としては最古級のもので、大王クラスの人物を埋葬した木棺が、奇跡的に朽ち果てもせず現在に残っていたことになるという。そのため、檀考研では草創期の古墳内部の実態を知る貴重な資料であるとしている。

さらに出土遺物として大型内行花文鏡（銅鏡・径39.7cm・宮内庁所蔵）一面がある。鏡は、大正 7年（1918）農作業中に出土しており、竪穴式石槨の北東にあった小石室中に鏡背を上に向けて置かれていたとされる。

北東近くの下池山古墳（天理市成願寺町）にも小石室があり、ここからも内行花文鏡径 37・6cmが出土しています。

柳本大塚古墳は古墳時代前期初頭（4世紀末～4世紀初頭）の古墳です。



内行花文鏡 径39.7cm

●石名塚古墳

古墳名	墳形	規模	埋葬施設	出土遺物
石名塚古墳	前方後円墳	約 110m以上	未調査	なし

参考文献

- 『天理市史上巻』天理市史編纂委員会編 昭和 33年 天理市役所
- 『改訂天理市史上巻』天理市史編纂委員会編 昭和 51年 天理市役所
- 『改訂天理市史下巻』天理市史編纂委員会編 昭和 51年 天理市役所
- 『黒塚古墳調査概報』檀原考古学研究所編 1999年 榊学生社
- 『宮内庁書陵部所蔵 古鏡集成』宮内庁書陵部陵墓課編 2005年 榊学生社
- 『桜井茶臼山古墳 : 附櫛山古墳』奈良県教育委員会編 1961年 奈良県教育委員会
- 『長岳寺』パンフ
- 『史跡黒塚古墳』パンフ